

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：22701

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K21270

研究課題名(和文) 終末期がん療養者の在宅での看取りに向けた家族支援プログラムの開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of a family support program for palliative care of terminal cancer patients at home

研究代表者

伊藤 絵梨子(宮崎絵梨子)(Ito, Eriko)

横浜市立大学・医学部・助教

研究者番号：50737484

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は終末期がん療養者の在宅看取りに向けた家族支援プログラムならびに評価指標を開発し、その有用性を検証することである。プログラムはPRECEDE-PROCEEDモデルをフレームワークとし、介護日記法を用いた家族の感情のコントロールに着眼し、評価指標はがん療養者のケアに対する満足度尺度である短縮版FAMCARE Scale日本語版を開発した。プログラムの有効性は無作為化比較試験にて検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、終末期がん療養者を支える家族介護者のQOL向上に向け、PRECEDE-PROCEEDモデルを用いて、家族介護者個人の健康状態や行動と、家族介護者を取り巻く社会環境の双方に対し、段階的、多角的にアセスメントしたうえで、プログラムを立案したことである。

社会的意義は、終末期がん療養者の在宅療養を支える家族介護者のQOLが向上することで、今後も増加するがん療養者の在宅看取りに向けて、療養者ならびに家族にとって質の高い在宅療養の継続、ひいては在宅看取りに貢献できると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop and evaluate a family support program and program outcome scale for family caregivers providing home-based palliative care for patients with cancer. The framework of the program was used PRECEDE-PROCEED model and program contents were focused on emotional control using a daily diary method. Program outcome was developed the short-form FAMCARE Scale Japanese version, a measure of satisfaction with care of cancer patients. The effectiveness of the program was examined a randomized controlled trial.

研究分野：地域看護学

キーワード：在宅緩和ケア 家族介護者 看取り Quality of life プログラム開発

1. 研究開始当初の背景

がんは1981年よりわが国の死因順位の第1位であり、今後も人口の高齢化が進行することを踏まえると、がんによる死亡者数は一貫して増加していくことが推測されている。近年、在宅での終末期療養に対する国民のニーズは高まっており、また、医療費抑制を目的とした医療政策においても、看取りまでを含めた在宅医療移行への取り組みが推進されている。しかしながら、がんによる実際の死亡場所は、施設内が9割以上を占め、自宅での死亡は1割に満たない状況である。(総務省統計局, 2014)。

国内外の先行研究によると、終末期がんの在宅での看取りの実現には、療養者の要因、家族の要因、環境の要因によることが明らかとなっており、在宅療養を支えることのできる家族の存在および看取りを可能にする体制が必要不可欠である。しかしながら、家族にかかる身体的・精神的負担は大きく、社会的役割との葛藤、活動の制限等が報告され、結果として在宅療養の継続を困難にしている現状がある。また、それら家族介護者の役割における影響は、介護における負担のみにとどまらず、介護者自身の健康および生活そのものに影響を及ぼすこととなる。近年は、核家族化により、世帯人数が少なく、介護を担うマンパワーは十分ではないことが考えられる。このような状況の中、終末期がん療養者と家族介護者双方にとって、在宅における質の高い終末期療養の継続ならびに在宅での看取りの実現に向けた家族介護者への支援は極めて重要である。しかしながら、このような背景を踏まえ、終末期がん療養者の在宅での看取りに向けた支援に関する実証研究は、ほとんど見当たらない。

終末期がん療養者の在宅死に関連する要因についてのレビューより、終末期がん療養者の在宅看取りには、療養者を支える家族介護者のQOLが関連することが考えられる。わが国における在宅終末期がん療養者の家族介護者のQOLを高めるためには、家族介護者自身と環境に働きかけることの重要性が示唆されている。

以上より、今後は、在宅終末期がん療養者を支える家族介護者および環境に働きかけることで、今後増加が予測される終末期がん療養者の質の高い在宅療養の継続と、在宅での看取りの実現に貢献することができると考え、終末期がん療養者を支える家族支援プログラムとその評価指標の開発に着手することが喫緊の課題と考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、終末期がん療養者の在宅での看取りに向けた家族支援プログラムならびに評価指標を開発し、その有用性について臨地における実証研究にて検証することである。研究は4カ年計画であり、【Study (2016~2017年度)】と【Study (2018~2019年度)】で構成した。【Study】は、終末期がん療養者の在宅看取りに向けた家族支援プログラム案と評価指標の開発であり、【Study】は、予備調査と本調査により家族支援プログラムの有用性を検証することとした。

3. 研究の方法

【Study】

1) プログラム案の開発

文献レビュー、フィールドワーク、エキスパートインタビューよりプログラム案を検討した。在宅終末期がん療養者の在宅看取りに向けては、家族介護者のQOLを高めることが重要であることから、QOLを最終目標とするPRECEDE-PROCEEDモデルをフレームワークとし、プログラム案を検討することとした。

2) 評価指標の開発

がん療養者の家族におけるケアに対する満足度評価尺度として、国際的に使用されている短縮版FAMCARE Scale日本語版を開発した。開発者であるOrnstein博士の許可のもと、日本語版を作成し、back translationについて開発者の承諾を受けたうえで、在宅終末期がん療養者の家族介護者を対象に、信頼性と妥当性を検証した。

【Study】

1) プログラムの有用性の検証

(1) 予備調査

Study1で開発したプログラム案ならびに評価指標について、在宅緩和ケアを受けるがん療養者の家族介護者20名を対象に、事前・事後評価デザインにより予備調査を実施した。

(2) 本調査

予備調査を踏まえ、在宅緩和ケアを受けるがん療養者の家族介護者105名を対象に無作為化比較試験にてプログラムの有用性を検証した。プログラム内容は、オンライン介護日記であり主要アウトカムは家族介護者のQOL、副次アウトカムは抑うつ、ケアに対する満足度とした。介入群は通常ケアに加え本プログラムの実施を、対照群には通常ケアのみが提供された。

4. 研究成果

1) プログラム案の開発

文献レビュー、フィールドワーク、エキスパートインタビューより得られた結果を、PRECEDE-PROCEEDモデルに統合した。その結果、在宅終末期がん療養者の家族介護者のQOL向上に向けたプログラムの要素は、終末期療養者の介護に特徴的である看取りに向けた準備として、家族介護者における感情のコントロールに着眼した。感情コントロール能力の獲得にむけて、介護日記法を用いたオンラインプログラムを開発した。

2) 評価指標の開発

短縮版FAMCARE Scale日本語版は、原版同様に10項目版、5項目版それぞれ1因子構造であった。Cronbach係数による信頼性の評価、ならびに確証的因子分析による構成概念妥当性の評価により、十分な信頼性ならびに妥当性が示された。

3) プログラムの有用性の検証

本調査において対象である家族介護者105名(介入群35名、対照群70名)の平均年齢は、 52.1 ± 11.9 歳、男性が54.3%であった。がん療養者の平均年齢は、 74.9 ± 14.3 歳、男性が53.3%であった。介入効果における分析では、本プログラムは家族介護者のQOLならびにケアに対する満足度への効果の可能性が示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 伊藤絵梨子, 田高悦子	4. 巻 55
2. 論文標題 日本語版Short-Form FAMCARE Scale の開発と評価 - 在宅終末期がん療養者の家族介護者における検討 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本老年医学会誌	6. 最初と最後の頁 81 - 89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) https://doi.org/10.3143/geriatrics.55.81	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ito E, Tadaka E	4. 巻 14 (4)
2. 論文標題 Quality of life among the family caregivers of patients with terminal cancer at home in Japan.	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Japan Journal of Nursing Science.	6. 最初と最後の頁 341-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jjns.12164	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 在宅終末期がん療養者の家族介護者への支援における介入アウトカムに関する文献検討
3. 学会等名 第38回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 森三千代, 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 在宅認知症中咽頭がん療養者の在宅移行期における家族の意思決定支援に関する症例検討
3. 学会等名 第29回日本在宅医療学会学術集会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 終末期がん療養者の在宅での看取りに必要とされる家族介護者の条件の検討 訪問看護師へのインタビューより
3. 学会等名 日本地域看護学会第20回学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 終末期がん療養者の在宅での看取りに求められる家族介護者のスキルの明確化
3. 学会等名 第37回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ito E, Tadaka E
2. 発表標題 Development of a competency to enhance the self-efficacy using the PRECEDE-PROCEED model in family caregivers of terminal cancer patients at home
3. 学会等名 The3rd KOREA-JAPAN Joint Conference on Community HealthNursing (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 在宅終末期がん療養者の家族介護者における自己効力感に着目したQOL向上プログラムのモデル開発
3. 学会等名 日本地域看護学会第19回学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 在宅終末期がん療養者の家族介護者における日本語版FAMCARE Scale短縮版の開発と評価
3. 学会等名 第75回日本公衆衛生学会学術集会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 伊藤絵梨子, 田高悦子
2. 発表標題 在宅終末期がん療養者の家族介護者における自己効力感向上のための家族介護者の行動指標とその前提要因
3. 学会等名 第36回日本看護科学学会学術集会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考